

孫武曰く、兵は国の大事、死生の地、存亡の道なり。察せずんばあるべからず。故にこれを経（はか）るに五事を以てし、これを校（くら）ぶるに計を以てして、其の情を索（もと）む。一に曰く道、二に曰く天、三に曰く地、四に曰く将、五に曰く法なり。道とは、民をして上と意を同じくせしむる者なり。故にこれと死すべくこれと生くべくして危（うたが）わざるなり。・・・（孫子兵法 始計第一の文）

これこそが真実である。兵とは、いとも簡単に凶器（暴力装置）となりうるので、い加減な気持ちでこのことを口にしてはならない。たとえば、漢の光武は一回出兵させる毎に、その心労がひげや髪の色に現れたと云われている。この教えを自ら慎むのは仁将である。この教えを知る者は知将である。この教えを重んじるのは礼将である。この教えに勇気を覚えるのは義将である。この教えを將たるのゆえんとする者は信将である。それゆえに、「道」の教えを優先して天地を計（はか）り考え、その国の將軍や法律を正しいものにしようと心掛ける者は、皆この始計第一「兵は国の大事・・・」を尊重しているのである。そうであればこそ、国に「道」が有る時は勝ち、国に「道」が無い時には敗れる。「道」というものは、上下相互に正しくあって、人としての忠義を尽くす事である。人は誰しも生まれたときから、自らの中に天から与えられた善なる心を有さないものはないのである。上に立つ者に仁義の道があれば、下の者がどうして帰服しないことがあるうか。（必ずや服従する。）

そもそも上代（飛鳥く奈良時代以前）には、人の心も素直にして純朴であり、世の中に聖賢の君主も多かったので、四海の内（国内）にもその徳化の恩恵を受けて「道」を知る士（さむらい）武芸をもって貴族や武家に仕える者も少なからず存在したのであった。昨今、道德の薄れた人情軽薄な末の世になったので、上に賢く能力のある君主も稀であり、下に廉直（心が清らかで私欲がなく、正直）な士もいなくなったので、兵の「道」を志す唯一の後継者も途絶えてこれを執（と）る人もいなくなり、凶器（暴力装置）という名称も何でもなく士が口ずさむようになって、これを慎む人もいない。しかし、今でも仁愛に富んだ賢明な主が上に存在して、兵の大事（国の存亡を賭けた戦争）を行おうとするならば、必ずや義戦に馳せ参じる者が現れるであろう。

そうであればこそ、「道」を実践するのに「天」を以てするというのは、常に寒暑・時

制・陰陽・吉凶・天候・日時・方角等を勘案し、万民の労をわきまえ、民衆や兵卒の命を大切にし、尊重することにより、これをいい加減な気持ちで扱わないことであり、これが即ち將たる者の礼である。上に立つべき將軍が民の命を軽んじて土や芥（あくた）の如く扱えば、下の者たちは市中のただの人の如く危険に臨んで自ら命を差し出す者はいなくなる。これを人罰と呼ぶ人がいるが、これほど怖いものはない。勝敗はここに有ることを知らねばならない。

「道」を実践するのに「地」を以てするというのも又、同様である。「地」は嶮易（けわしい、たやすい）・通絶・死生等である。一般的には大部隊を出勤させ、戦闘する場合の勝ち負けや得失というものは、地形によることが多い。もしも地形を偵察して地の利をよく知っていなければ、多くの兵卒の命を墮とすことになる。後方に賢明な將軍がいたとしても、救うことはできない。前線に勇士がいても、十分に能力を発揮して戦うことができない。したがって、良將は嶮しく、踏破（とうは）（どうは）困難な地形を熟知し、「無強を凶制する」と云われる。「無強を凶制する」とは、「強者無き軍団を意のままに凶り、制する」ことであり、こうしたことが可能になるのは、人々が皆、將軍が民衆や士卒の命の痛みを感じているのだということを知り、たとえ死んでも全く恨まないという心があるからだ。このようにして、「地」の道をも又、これを得るようになれば、兵士たちの心も定まって、ここに勝気が実る。それゆえに、「良將の下に臆兵無し」と伝えられるのである。勝気の根元とはただ一つのものではなく、強者無き集団にまで到るものである。これまで述べてきたこと（「道」、「天」、「地」）が、必ず考察しなければならぬ三つの事である。

「道」を実践するのに「將」を以てするならば、何はさておいても軍の生き死にを左右する者をどうして厳選しないことがあるか。（最適な人物を厳選しなければならぬい。）大部隊司令官の將軍たる人は申すまでも無いことである。旅や卒といった中・小部隊の指揮官一人ひとりであろうとも人選を誤り、適格性に欠ける時は、下級者が苦しみ、兵卒は親しまない。その悪評がついに上級の將軍や君主に及び、それでも止むことが無ければ、その咎（とが）が罰されるべき行為、非難されるような欠点（を以てこれを斬る）ことになる。これでは誅殺（罪をとがめて殺すこと）が止むこと無く、上下の心が相互に離れて、万事が成功しない。このような状態を「孤軍」と名付けられ、弓などの武器を用いるにも、正しい道理に抛り用いること無く、弓馬の家業も未熟な者ばかりである。

下級者に不忠の心が湧き出てきたり、風俗が善良へと移らない根源は、全て上級者にして長たる者の人選が悪いことに起因する。『三略』下略に「賢人帰する所は其の国強く、聖人帰する所は六合同す」とある。いつの時代でも、ことと次第により下級者は上司の情に依拠して、一時の恩でさえも感じるのであるから、最も適格な人物を選ぶことが重要である。

「道」を実践するのに「法」を以てするならば、我々の「道」はもとより、節制（規則正しく統制がとれていること）であるとともに、曲法（軍隊の編成区分を定めた法）を前提としたものでなければならぬ。ただ愛するだけで禁ずることが出来ないのは「法」が無いということである。兵が多数集まっても、隊列区分がなされないのも「法」が無いからである。勝つことだけを追求して止まることがないのも「法」が無いからである。譎詭（きけつ）Ⅱうそを言ったりして人を欺くこと）ばかりで正しいことが無いのも「法」が無いからである。敵に全勝できないのも「法」が無いからである。法令がよく整い、我が先ずこれらを全うし、己を治めてから他を責める。こうすれば、どうして克服できないことがあるのか。「法」は「理」である。「理」の外に「法」は無い。法令が出て、人がこれを信用して受け入れないのは、道理において未だに尽くされていない所があるからに他ならない。これまで述べてきたこと（「道」、「天」、「地」、「将」、「法」）が必ず考察しなければならぬ五つの事である。

こうしたことから、孫武が「之を経（ただ）しうするに五事を以てす（五つの事からにより勝敗をはかり考える）」と謂われるものは、切に兵法家としての教え・戒めを示すところのものであり、「専ら己に克ちて而して敵無し」とする所以である。そうであればこそ、「良将は勝つことを難きに求めず」とされるのである。こうした言葉は、道理に外れたことによつて勝敗をはかり考えない、という意味である。戦う前に勝敗をはかり考えることで、勝ち易きに勝つのである。おおよそ兵とは不祥（良くない、不吉なもの）であるというけれども、その道理を悟り、実践できる者がこれを用いれば、どうして兵を不祥などと云えようか。元より人には生まれながらに天与の五才（仁・智・礼・義・信）というものがある。凶器などというのは、干戈（武器）そのものを指すに過ぎない。吉凶は、人がこれをどのようになすかであり、聖人がこれを用いれば即ち「吉」、愚劣な者がこれを用いれば即ち「凶」となる。懲悪攘乱（悪を懲らしめ、乱を打ち払う）の徳こそが、最高の徳であり、これに及ぶものは何も無いのである。